

歌舞伎座劇評〈摘録〉

一番目 里見八犬伝

三木竹二

〈出典：「歌舞伎」第31号、明治35年12月〉

序幕 神宮川遊漁の場

最初在郷唄の「私が此身は野もせの虫よ」へ水の音を冠せて幕が明きます。浅黄幕の前で里人が捨白をいって引込み、辰巳八景の合方に水の音を冠せて幕を切って落とすと、舞台一面波布を敷きつめ、真中の網船の上に、松助の荘官墓六、鬘は胡麻の平太、紋羽そぎ袖の長襦袢、浅黄の股引、腰篋を付け、網を提げて上手に立って居ますと、真中に染五郎の犬塚信乃、鬘みより鬘、御召縮緬胡麻柄の着付、納戸献上の博多帯、下手に八百蔵の網干左母次郎、逆熊、黄八丈唐出横縦縞の着付、納戸無地の博多帯で座り、その下に成三郎の船頭が居ります。ここで墓六が引上げた魚を、信乃が手伝って桶へ入れる事なぞあって、今度は墓六が奥へ向いて網を打つ途端と見せて、切穴へ飛込むと、ドンと水の音を打込みます。そこで船頭が飛込むのに続いて、信乃も上着を脱ぎ捨て、浅黄縮緬中長の襦袢になって、同じく向うへ飛込むと、左母次郎が墓六に頼まれた筋を云い、最初三人の刀を抜いて、鞘へ替り替えて見るのがキッカケで船が廻り、左母次郎は後向で目貫を煙管で打抜き、中身を入れ替え、真向きになって墓六の刀の鞘へ川水を入れる処へ、土太郎が浮き上って又沈むと、信乃が濡色の着付に替り、左へ墓六を抱えて浮き出で、右を船縁へかけると、左母次郎が引上げる振をして、その手を払うので沈み、又浮上って水を吹くと、左母次郎が墓六へ手をかけるのが、木の頭で水の音を冠せ幕になります。この墓六は一癖ありげに見え、信乃も生真面目で好く、左母次郎の拵も穏当でした。然し読本の方では信乃が裸体になって飛込みますのを、芝居ではそう出来ないもので、襦袢にしたのでありましようが、丈の高い人ですから、浅黄の襦袢の下から足が二本ニヨキリと出た格好は、余り好い図ではありませんでした。

二幕目 荘官墓六内の場

在郷様の稽古唄で幕が明くと、下手に世話格子のある平舞台で、女中が燭台の掃除をして居ります。これが入ると蟹十郎の女房亀篋、丸鬘、小紋紬の着付、繻珍の丸帯で額蔵を呼び出しますと、奥から家橘の下部額蔵、椎茸の袋付、木綿茶紺棒縞の着付、茶紬の帯で出て来て、亀篋の信乃を殺せという詞を聞き、亀篋が引込んだ跡を見送って、「怖ろしい奴等だなア」と独白あって奥へ入りますが、亀篋は人の好い婆さんに見え、額蔵は体が意気ですから、この頼みを眞実に受け込みそうでした。ここで道具が廻る中程から、時の鐘に風の音を冠せ、道具が止まるので鐘を打上げます。舞台は二重屋体で簾がかかって居て、独吟の合方になり、本調子「ものおもう沢の螢をあつめてし、学びの窓の若草も」で簾が上ると、上手に染五郎の信乃、伊予染縮緬の着付、浅黄縮緬の襦袢、革色献上の帯で、見台へ向って読書の体です。ここで独白があって、見台を片付けると、又唄になり「篋の一と夜もある物を、

幾夜もつらき物思う」で、奥から芝翫の娘浜路、潰し島田へ緋鹿子の手柄、薬玉の簪、藤色地中柄友禅の振袖、板締縮緬の振り下げ帯で出て来て、立身のまま信乃を見て鼻で泣き、右の袖を顔へ当てて座ります。信乃は煙草入を出し、これから二人の間答になりますが、芝居では墓六が信乃の出立前に、二人に盃をさせるという事になって居ますから、浜路の押掛けて来るのが、本文ほど哀れにありません。それに「そりゃお胴欲でござりまする」という芝居口調と、「もと妾には四人の親あり」という本文の文章と混じって居るのが耳障りです。そこで信乃に叱られ、「それじゃというて、たった一言」で、傍へ寄ろうとして信乃と顔を見合せ、下手を向く情愛は味がありました。「かげさえ暗き女夫星」の唄で奥から松助の墓六、鳶八丈の綿入、黒八丈の帯で謡をうたいながら、三宝を持って出て真中に座り、あとから亀笹も菊三郎の下女お由も跟いて出て来ますが、この下女は立派すぎて、牡丹灯籠のお米の様でした。それから「たまに逢う夜は七夕の、願いの糸のままならで、千代を寿く嬉しさも、包むに余る笹の露」の唄で二人の盃事になりますが、ここで浜路が首を傾げ、懐紙を斜に持ち、紅白の簪の総が鬢へ垂れた格好は愛らしく、抜き衣紋にして居る額から帯迄の間が僅か五寸位しかなく見えるのは、確かに十代の処女になり澄まして居ました。そこで信乃は旅仕度をすると言って、浜路と一緒に奥へ入る処は「立名もいつか旅衣、浦山しさの夕月夜」の唄で五の句の上げになります。仕度が出来て奥から信乃が、瓢箪小紋袖の着付、納戸琥珀の半合羽、小紋絹紐付の股引で出て来て暇乞いをすると、亀笹に呼ばれて額蔵が、鉄納戸袖の着付、盲縞なまこ襟の合羽、紺絞りの下りで出て来て、信乃の振分包を受取り、兩人とも菅笠を持って、稽古唄の合方で向うへ入りますが、ここの信乃の若氣た拵が、この人の体に適らなかった。それに本文の信乃は八犬士中での儲役ですから、此処へ行こうという役者は、死んだ菊之助位のものでしょう。額蔵は新富座の時の染五郎が、近頃での拵り役でした。今度の内では浜路が柱に手をかけて、信乃の後影を何時までも見送って居る情愛が好かった。そこで墓六夫婦は代る代る浜路に陣代を簪に取れと勧め、浜路が聞かぬので切腹するといひ、鼠絹襦袢の肌脱ぎになり、刀を抜いて左の膝を立て、腹へ突き立てようとする科を二三次しますが、これが余り空々しかった。浜路が承知をするので刀を納める処も、「刃物を納めて下され」といわぬ内に、中身を拭くのは手廻し過ぎて、因業な墓六の腹に合わない。ここは市蔵の様に今一度念を押す方が好い。浜路がお由に連れられて入ると、奥から吉右衛門の下男春助、ぼつと袋付、松坂木綿横縦縞の着付、小倉一本筋の帯、浅黄の股引で呼ばれて来て、陣代方へ知らせに行けといわれ、花道へかかって「今年は簪の閏年と見えるわい」で尻を擲げ向うへ入るまで、当込がなくて好い。あとで村雨の刀を亀笹が見たがるのを、墓六がじらして右の袖で刀を押え、「イヤイヤこの刀は其方には見せまい見せまい」と首を振って上手を向く科が二度ありますが、これも松助では少し意気になりました。それから市蔵も此人も刀の拵を褒めましたが、摺換えたのは中身ですから、これは腹違いです。然し刀を抜いて水の滴るのを、首を傾げ眼を閉った顔に受けて喜ぶ処、「ことに寄ったら、ウフフフ国取大名」の笑い、「この身の運が」でピタリと刀を鞘に納め、水の撥た心で顔を蹙め、「こりゃ甚しい、水気じゃわい」の道具替りは、欲気の中に可笑

味を混ぜて旨いものです。亀笹の「オオ冷た」も好かった。次は裏手堀外の道具で、道具替りの中途から独吟になり三下り「千年まで友と契りし松竹も幾千代かけて末までも」で芝翫の浜路、黒地縮緬へ四季花寄せ模様振袖で、手に水紅色のしごきを持って出て来て、「操を変えぬ此松を」で松を見て、念仏を唱えて合掌し、しごきを松へ掛けて結ぶのが「ほんにかわらぬ千代の影、いつか願いを結び松」の唄です。「そうじゃ」で下手へ廻り首を縊ろうとすると、最前から下手で様子を覗いて居た八百歳の左母次郎、黒の長襟の掛った藍弁慶縮緬の着付、茶献上の帯で、脚楊枝を捨てて後からかかえ、「死ぬのはまア、コレ止めにしねえよ」で入れ替って下手へ浜路を押し据えますが、この拵が余り凄味一方になるのは、これまでの紋切形ですが、その為に本文のニヤケ侍に遠ざかりました。浜路は左母次郎の詞に乗って、「嬉しゅうござんす」で手を合せる、左母次郎は松ヶ枝のしごきを取ると、知らせの木に付き、「松のえにしも夏の短か夜」の唄が三の切の上ですが、ここで浜路が左母次郎の手に乗るという筋も、浜路の役を悪くしました。奥座敷は道具代りの中ばから高砂の「あい相生」の合方で止ると、上あいの奥から松助の墓六、五つ紋茶袖の着付、白足袋で「娘々」と呼びながら出て来ると、正面の奥から蟹十郎の亀笹、裾模様黒縮緬の着付で、鼠地繻珍の丸帯を締めながら出て来ますが、ここの亀笹は気無性の為か、少しも慌てた様子が見えなかった。それに反して墓六は「ハハハハ早く」の調子、浜路の行方が知れぬと聞いて「エエエエエ」と立ちながら一寸腰を落す工合は旨いものですが、「ハア早く」で飛び上って足拍子を踏むのはなくもがなです。そこへ脊助が帰って陣代が見えると聞き、「アアア慌てるな」で上下へ行ったり来たりして、「羽織々々」で股の辺を撫で、「袴々」で肩の辺りを撫で、亀笹の持って来た唐棧の平袴へ両足を踏み込んで駈け出すと、亀笹があとから腰板を持って付いて行く処は大受です。そこで墓六は腰板の裏を宛て、黒斜子の羽織を裏返しに着て、上手へ行って柳樽を調べ、下手へ来て向うを見、真中へ来てベタリと座り、胸を摩ります。すると向うから「桐の真垣」の合方で、新十郎の軍手五倍次、黒紋付の羽織袴で先に立ち、次に宗三郎の簀上宮六、太鬘、鶯茶の紋付、大小霰の上下で、あとから升歳の卒川庵八、翫助の若党無二内が付いて出て来ます。宮六の鬘の一が長過ぎるのは、余り馬鹿々々しく思いましたが、香袋を袂へ付けずに、一寸出して振りかけるだけなのは好く、無骨な田舎侍のいやらしい趣も、好く適まった方でした。五倍次は楽に演て居ましたが、少し品が好過ぎ、庵八は硬まった気味です。墓六は羽織の事をいわれて、「これはこれは」で、表を出して着て、紐は結ばずに延上り、口を明いて下手を見ます。次に娘が逐電と聞いて宮六が「そんならあのお娘御はチチチチチ逐電か、ワアツ」と大声に手放して泣く処は好く、一同が刀へ手をかけるので墓六が、「暫く暫く」で膝を崩し、後向きになって、両手を開いて止め、村雨丸を見せるといって奥へ入り、次の出は羽織を脱いで刀を提げて出ますと、宮六が水気を拭すという処で、「娘が逐電したと聞いて、先程から頭痛がしてならん」といって、紅木綿の手拭で鉢巻をし、浅黄の襟のかかった緋縮緬の襦袢両肌脱ぎの上へ萌黄の刀の提緒で襷をかけ、石橋獅子の狂いの合方になり、刀を振り廻す処は当込み気がなくて好い。燭台へ打当てて曲ったのを見て、それで舌を扱ぎ、「何のこっだ」で打捨やる処も好い。一同が抜き連

れるので、墓六夫婦が灯を消すと、十日恵比須の合せものの合方で立廻りになりますが、その内に亀笹が前の樽を持出すのを墓六が取ると、今度は亀笹が萌黄の油單を持って来て墓六に冠せ、自分も後へもぐるので獅子の形になります。ここの滑稽も、この場には釣合わぬ箝物ですが、見物は喜びます。兎に角松助の墓六は江戸式の軽味で、灰汁抜けたものではありませんが、本文のシブトイ性根は市蔵の方が箝って居ました。それから好い程に墓六夫婦が斬付けられて倒れるのが幕切になりますが、ここの鳴物はあんば、駅路、砧なぞを使います。

三幕目 円塚山の間

禪の合方に山嵐を冠せて幕が明くと、浅黄幕の前で、仕出しの百姓が火定の筋を云い引込むので幕を切って落すと、向う一面の岩の張物、真中に空洞のある杉の大木、上手に火定の切穴から火焰の燃えて居る詠え、下手に円塚山と彫った塚の張物がありますが、この舞台面が岩石嶮々たる鞍馬式なのは大袈裟です。本郷丸山の写生にしると誰もいいはせぬが、木立の多い道灌山式にして貰いたい。本文の「西には連山嵯峨として」とあるのは、遠見の事です。そこへ向うから団兵衛、梅助の駕籠屋加太郎、伊太郎が四ツ手駕籠の中程を淡紅色のしごきて結えたのを担いで出て舞台の下手へ下すと、向うからバタバタになり、八百蔵の左母次郎が尻端折跣足で出て、舞台の真中まで来て、酒代を遣るのを投げ返す処は、駕籠屋両人大出来です。ここで左母次郎が「ほざいたり蚊蜻蜒めら」の白は、例の通りぎこちなくて困る。それから二人を追散して、下手の駕籠から芝翫の浜路を連れ出し、今まで云ったのは皆な嘘だというので、浜路が驚くと、「これ程思う信実男、あんまり憎うもあるめえがのう」で、切株に腰をかけ、腕組をして覗き込むと、浜路は「夫に手渡しせんものを」で中腰になって、一寸上手を見て、口を堅く結び、軽く膝を打ち、「何の嘘をいうものかいなア」では振袖をなぶります。そこで左母次郎が村雨丸を抜いて見せると、「又も一叢降り来る雨」のチョボで、雨の音を聞かせます。浜路が「夫の敵、覚悟しや」で斬り付ける、左母次郎はその刀を拵ぎ取り、襟髪を取ると浜路は斜に倒れて、右の手を上げて顫わせます。左母次郎が浜路を一太刀斬ると浜路は鬘を捌き、緋縮緬丸襦袢の片肌脱になります。左母次郎は「月の出るまで聞こうかい」で、抜刃を下へ突き立て、煙草の火定の火で吸付け、次に切株へ腰をかけ、毛抜を出して髯を抜きます。浜路が「サアサア、早く殺せ殺せ」の白廻は烈女の魂が見えて好いが、左母次郎の「円塚山のオ、土となアレ」は余り悪党に成り過ぎました。そこで左母次郎が浜路の止めを刺そうとする処へ火坑から手裏剣が飛んだ心で、右の腕を押えて倒れます。するとドロドロを打込んで、火定の坑から團十郎の犬山道節、頭を白布の「ほうかん」で包み、白羽二重無双の行衣で、眼を閉じ、印を結んで鞆り上げになると、同時に雲が除れて月を出します。道節が印を解いて、火坑の下手へ下り立ち、左母次郎が心付いて、斬り付けるのを山形に替し、村雨丸を拵ぎ取って、拝み打ちにすると、左母次郎は藪蔭へ倒れます。そこで道節は刀を右に持ち、上から透して見、次に蹲んで火定の火に照して裏表を眺め、又立上って屈みなりに見て、「実に音に聞く村雨の名剣」云々の白になり、

「露か、滴か」で刀を上向きに翳し、「我手に入りしは」で刀を下げ、向うを見込んで、屹と思入をして、「あァらァ」を顫るわせ、「喜ばしやなァ」と延ばす調子は悪くはないが、記憶力の衰えた為に、白が片言混りになるのは気の毒です。「忝けなや」のチョボで両手を刀へ掛けて拝み、鞘に納めて切株に立掛け、前向きに倒れて居る、浜路の傍へ寄って「ほうかん」を取って、百日鬘を見せ、その白布を浜路の傷の上へ二重に巻き、後で締め、右手を胸先へ差込み、活を入れ、「やよおうな、心を確かに持て、これ浜路ィ」というと、浜路が心付いて驚き、立とうとするのを抱き止め、自分は切株へ腰を掛けます。これから昔語になって、「深く慕うは貞なり孝なり」は辞色共に烈しく、「これ又輪廻のなす処か、ア、無惨な最期を遂げたるよナァ…」と声を顫わせて、両手の掌で眼を押える処は応えました。浜路は捌いた鬘と緋鹿子の切が右の肩へ掛かった儘、「会々結びし夫にさえ、命果敢なく中絶えて」で右手を前へ出し、向うを見込み、「迷うわいな」のチョボで立上がろうとして横に倒れます。道節が「君父の仇には、替えられぬわァ」は、前年に比べると、勇氣沮喪の気味で褒め兼ねますが、浜路が「次第に弱る急処の深手」のチョボで、中腰になり、兄の傍へ摺り寄って顔を見上げると、道節が右手を妹の肩にかけ、「オオ」と頷いて笑を受け、落入るのを見て左で拝む情愛は好かった。そこで道節は浜路の死骸を火定の坑に入れ、柴を燻ると火がパツと燃えますので、「泡影無常々々々々南無阿弥陀仏」と唱えて合掌し、左手で刀を取り、右で涙を払い、下手へ行き掛けると、月が隠れます。最前から下手藪暈の蔭で窺って居た家橘の額蔵、合羽なしの前の拵でツカツカと出て立塞がると、道節は顔見合せて後へ下り、付け廻りになって前へ進み、右の手を懐へ入れると、額蔵が刀の鑑を取って引戻すので、トントントンと下り、道節が鑑返しをするので、一つ廻り、ほぐれて上下へ分れ、道節は上手で肱を張り、左へ提げた刀の柄頭へ右手をかけて、グイと見込むと、額蔵は大手を拵げて立塞りますが、ここの道節の凄味は無類です。これから本釣、竹笛、そうぼん、篳の鳴物へ「楠公」の合方を加えただんまり模様になり升が、その大概を云えば、額蔵が後から廻って、又太刀へ手をかけるのを、道節が右の方へ引落とし、額蔵が左の膝を突くと、道節が上から額蔵の右の肩へ刀の鞘を当てて、一寸見得を切ります。そこで二人とも手を取って後向きになり、振離す途端に、額蔵の守袋は道節の刀の柄へ搦まり、分れて道節が抜き掛けると、額蔵が臂を止めて一寸見得をし、抜合せて、二人とも肩へ斬込まれ、次に道節が額蔵の脛を斬って後へ下り、ドロドロを打込んで、火坑へ飛び込みます。暫く放心した額蔵が上手へ来て玉を拾うと、道節は杉の空洞の中へ、萌黄木綿と紺地錦半布変りの四天、白と金糸のばれん、紺甲斐絹の紐付股引、白大巾縮緬の扱きで糶上げになり、白刃を取直して、下手の額蔵と顔見合せるのが木の頭、ドロドロのカケリで幕になります。